フォトエッセイ『国境なき音楽紀行』

第3回 イスラエルとパレスチナ ～戦火に奏でる平和の歌～

日頃、音楽を通して人々と交流し、世界各地を旅することが多い。これら旅の印象と感動を、フォトエッセイという形でほんの一部でも日本の皆さまにお届けできればと思う。　平井元喜

エルサレムの「嘆きの壁」で祈りを捧げるユダヤの民

「どちらが正しいか」という議論は、「自分のほうが正しい」と双方を意固地にさせ、争いを生む。むしろ「どうやったら、もっとおもしろくなるか」と智恵を出し合い楽しいことをすれば、和やかになり相手と仲良くなれる。外国人や異文化と交流する際の極意といえよう。今年8月、日本では戦後70周年を迎えるが、世界には今なお戦争や紛争が続く地域がある。今こそ、平和のために芸術や文化、そして音楽が必要とされるのではないか。

私自身、演奏旅行で紛争地域へ赴くことは少ないが、2012年11月に行ったイスラエルとパレスチナでの3公演は忘れ難い。イスラエル軍とパレスチナ武装組織の戦闘の最中だったからだ。日本とイスラエル外交関係樹立60周年にあたり、外務省と在イスラエル日本大使館、対パレスチナ自治政府日本政府代表事務所などの協力を得て、'07年より作曲家および芸術監督として主導するプロジェクト「日本の童話絵本を世界へ」（朗読・音楽・映像のコラボレーション）を上演した。日本文化を紹介する目的に加え、日本が中東和平に向けソフトパワーでイスラエルとパレスチナの間を取りもつ、という隠された意図もあった。

パレスチナでは、エルサレム近郊のラマッラ（12日、アルカサバ劇場）で地元の中学生らを招いて公演した。パレスチナの演劇界の重鎮ジョージ・イブラヒムがアラビア語で朗読し、私自身がピアノソロで音楽を担当。苦難に満ちたパレスチナ人やユダヤ人の歴史を思い、また平和への願いを込めて、自作『Grace & Hope ～祈り、そして希望』（2011）も演奏した。イスラエルではハイファ（14日、ハイファ美術館オーディトリウム）、テルアビブ（15日、カメリ劇場）の2都市で公演。名優ヨラム・ヨセフスベルグがヘブライ語で朗読し、音楽は新進気鋭のヴァイオリニスト、フーリー兄弟が演奏、ユダヤ系とアラブ系アーティストの共演が実現した。

しかし14日、イスラエルがガザ地区への空爆を開始し、15日にはテルアビブに向けてロケット弾が発射され、湾岸戦争以来初めてテルアビブ付近に着弾した。イスラエル、パレスチナ双方で罪なき多くの市民や子どもたちが犠牲となった。

15日夜のテルアビブ公演終了直後、街中に大音量の空襲警報が鳴り響き、避難命令が出た。観客、出演者、劇場関係者全員が一斉に地下シェルターへ移動した。不安を抱きながら防空壕で待機する中、お互いに家族の安否を気遣い、努めて前向きな言葉をかけ、励まし合った。人種を超えた連帯感が生まれた。

折しも2週間後の11月29日には、国連総会がパレスチナを国家と認める決議を採択したが、中東和平への道のりは険しい。

人種・言語・宗教の壁を超えて、音楽は人の心に直接響く。そして、音楽を愛するという一点において、世界に国境など存在しない。この信念を胸に私の旅は続く。

朗読を担当したヨラム・ヨセフスベルグは、イスラエルを代表する俳優として名高く、声優としても主要ディズニー映画のヘブライ語吹き替えなどで活躍する

エルサレムの旧市街

公演を行ったイスラエルのハイファ美術館。のどかに見えるが、この日、ガザ地区への空爆が始まる

撮影：平井元喜（本人の写真を除く）

ひらいもとき
ピアニスト、作曲家。'73年東京生まれ。桐朋高校、慶応義塾大学文学部哲学科、英王立音楽院大学院卒。ロンドンシティ大学修士課程修了。これまでヨーロッパ・中東・アフリカ・米国・中南米・アジア各地を演奏旅行。米カーネギーホール、英ウィグモアホール、欧コンセルトヘボウ等でしばしばリサイタルを行う。2015年は、ラ・フォル・ジュルネ、紀尾井ホール（7月23日）等のほか、中南米、カリブ海、セネガル、英国、イタリア、北欧などで演奏する。音楽を通して平和・環境・医療・教育問題にも積極的に取り組む。3.11以降、内外各地で復興支援コンサートを続け、これまでに1,500万円以上を被災地へ寄付する。NHK文化センター、時事通信社トップセミナー等で講演。BBC、NHK、テレビ朝日（「題名のない音楽会」）など世界各地でテレビ・ラジオにも出演。９６年よりロンドン在住。

平井元喜公式ウェブサイトにて旅の写真を公開中。もっと世界の人々や風景を見てみたい！ という方必見です。 www.motoki-hirai.com

ユダヤ系とアラブ系の出演者とともにカーテンコールを受ける筆者（ハイファ美術館オーディトリウムにて）

写真左から、朗読のヨラム・ヨセフスベルグ、『注文の多い料理店』の音楽をヴァイオリンで演奏するイナル・フーリーとヒシャーム・フーリー。この後、空襲警報が鳴り、全員が防空壕へ避難することに

パレスチナのアルカサバ劇場前で筆者

終演後、パレスチナの子どもたちの勢いに圧倒され、たじろぐ筆者。元気な笑顔は紛争など微塵も感じさせない

「100万回生きたねこ」のフィナーレ（自作）をピアノで演奏する筆者。朗読は、アルカサバ劇場総監督も努める名優ジョージ・イブラヒム

開演前のアルカサバ劇場内。スクリーンに映るのは「モチモチの木」